

白い巨塔 (下)

山崎豊子



新潮文庫

とう 巨 白
塔 い 下
巻

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 104 J

昭和五十三年四月三十日発行
昭和五十三年十一月五日十刷

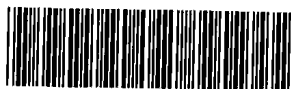
著者 山崎 豊子
やまざき とよこ

発行者 佐藤 亮一
さとう りょういち

発行所 株式会社 新潮社
しんこう

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。



297093

日文 701523741

新潮文庫

白 い 巨 塔

上 卷

山崎豊子著



新潮社版

2472

昭和三十一年八月

白
い
巨
塔
下
卷

十二章

新館南向きの第一外科病棟は、財前新教授の総回診を前にして、ものものしい気配に包まれていた。

「只今から総回診が始まります！」

病棟婦長の癪高い声が廊下に聞えると、若い看護婦たちは弾かれるように各病室の扉を開けた。病棟婦長に先導された財前教授の姿が見えると、看護婦たちは、廊下に並んで迎えた。

財前新教授は、仕立おろしの白衣のポケットに片手をつ込み、広い肩幅をそらせた遅しい体軀で先頭にたち、一步離れたうしろに、講師から昇格した金井助教授、さらに一步隔って、医局長から昇格した佃講師、そしてまた一步離れたところに病棟係から医局長に昇格した安西が続き、安西医局長のうしろには、外来診察を担当している医局員以外の全医局員四十数名が、入局順にずらりと二列になって続いている。

その順位で、一目で医局内の序列が解り、列のうしろになるにつれ、白衣の裾が皺だらけで、体に合わぬだぶだぶの白衣を着ている若輩の医局員たちが連っていた。南病棟の病室の前に来ると、

「午前中の回診は、あと、これだけかね」

財前教授は、顔を正面へ向けたまま聞いた。一歩うしろに控えている金井助教授は、教授との

距離を縮めず、上体だけを前へ折り屈め、

「はあ、ここだけで、あとの病棟は午後になると思います」

その応え方は、助教授であった財前が、曾て東教授に応えたその姿勢と同じであった。

財前は鷹揚に頷き、婦長の先導する病室へ大股に足を踏み入れると、あとに続いた助教授以下の医局員たちも、ぞろぞろと続いて入室し、左右、前後から教授を取り囲むように並び、病室に入りきれない末輩の医局員たちは、廊下から背伸びして遠巻きした。

五十二歳の女の患者は、そのもののしさに怯えたような表情で、ベッドの上から受持医を見上げたが、受持医は患者より、教授の方を気にし、

「カルテは、この通りでございます」

直立不動の姿勢で、カルテを提示した。十二指腸潰瘍疑診で来院し、財前教授の診察によって胆石症と診断され、手術を待っている患者であった。財前は、受持医のさし出すカルテを一瞥し、「エックス線の所見はどうかね」

「はあ、やはり教授のご診察通り、間違いなく胆石を証明しております」

すぐエックス線写真を示した。財前は手を伸ばして写真を取り、窓の明りに照らした。そのはずみに、診察衣の袖がたくし上り、袖口から金台に翡翠を填込んだ豪華なカフス・ボタンがざらりと覗き、医局員たちの眼が、一斉にエックス線写真よりそこへ集った。

「じゃあ、胃液検査はどうかね」

「はあ、酸度は正常です」

「そんならいいだろう」

患者の方へ視線を移し、患者の右上腹部のあたりを手馴れた手つきで触診した。

「今日は痛まないね」

腫瘍を軽く押さえながら云い、患者が何か聞きたげな顔を見ると、突っぱねるように、くるりと背中を向けて病室を出た。医局員もすぐそのあとに従った。

一病棟に三十室、二病棟、百二十人の患者を一週間に一度、午前十時から午後四時頃までに回診し終らねばならなかったから、一人、せいぜい二、三分ずつで、患者を診察するための回診というより、教授が医局員を引き連れて、自分の管轄下を見て廻るいわば大行列のようなものであった。

南病棟の総回診が終ると、既に一時を過ぎていたが、財前は少しの疲れも見せず、

「今日は、ちょっと長くかかったな」

上機嫌の顔で、首からぶら下げた聴診器をはずしかけると、金井助教授のうしろに控えている佃講師が、さっと金井の横をすりぬけ、財前のうしろに廻って、聴診器をはずした。財前は、当然のように佃に聴診器をはずさせ、

「やあ、ご苦労——、午前の回診はここまでにし、午後の回診は、昼食をすませ、二時半から始める——」

居並ぶ医局員たちにそう云い、くるりと踵をかえして教授室へ足を向けた。

教授室に戻ると、財前は皮張りの回転椅子にどっかり腰を下し、教授になってから喫いはじめた葉巻をシガー・ケースから取り出して火を点け、ゆっくりと煙を吐き出した。

前教授の東が、在官中の時には、扉をノックすることさえ気を遣ったこの教授室であったが、自分が代って教授になった今、新しい皮張りの回転椅子も、大きな机も、天井まで届く書棚も、全部、自分の意のままに使えるのだった。この新館増築に東は、鵜飼とともに駆けずり廻りなが

ら、新しい教授室に半年しか居れず、名誉教授という肩書を得ただけで、大学を去って行つたのだと思うと、財前は冷やかな笑いがこみあげた。

なまじ自分を追い出そうとしたばかりに、かえつて東自身が、惨めな去り方をしたのだという報復的な思いがし、八年間、自分が仕えた教授という懐旧の念は不思議なほど湧かなかつた。

不意に扉をノックする音がした。

「誰かね」

「はい、庶務の者でございます」

「入り給え」

庶務の女事務員が、郵便物を抱えて入つて来た。財前は、堆い郵便物を面倒そうに手に取り、ざつと眼を通して行つた。教授になつてから文部省関係の書類や、学会事務局関係の郵便物が俄かに多くなり、時々、東前教授宛の郵便物も混っている。それがあると、財前は、きまつて自ら転送附箋を書き、東邸宛に転送することになっている。それを書く時、なぜかいいようのない愉しみを覚えるからであつた。今日も、まつ先に東宛の郵便物を選び分けようとして、外国からの航空便に氣附いた。差出人を見ると、第十回国際科学会会長から財前宛であつた。急いで封を切り、タイプライターでうたれたその書面に眼を通すなり、財前の顔に強い輝やきが漲つた。そして、暫くその輝やきを溜めるようにじつと眼を凝らしていたが、ふと思いついたように机の上のインターフォンで佃講師に入室するように云つた。

佃は、教授室へ入つて来ると、

「お呼びでございますか」

よく動く眼で、財前の顔色を窺つた。

「うん、ちょっと君に報しよせることがあるんだ、まあ、これを読んでみ給え」

さっきの外国郵便を渡すと、佃は、机の前に起って眼を通し、

「先生、すばらしいですね、ドイツで開かれる国際外科学会からの招聘状しちへいで、しかも、食道外科の特別講演を依頼して来ているではありませんか」

佃は、昂奮きうふんした声で云った。

「君なら、この場合、どうするかね」

財前は、ひどく冷静な云い方をした。

「どうする？ 先生、もちろん誰だつて飛んで行きますよ」

「そうかね、僕はどうしようかと迷っている」

「そんな、一体、何を迷われるのです」

佃は、呆氣あつちに取られるように云ったが、財前は平静な表情を崩さず、

「佃君、苦戦の末、闘い取った教授選が終つてまだ二カ月しかたっていないし、正式に教授に就任してからは、まだ一カ月目だ、そして、教室内の人事を大幅に異動したばかりの落ち着かない時期に国際外科学会から招聘状が来たからといって、おっ取り刀で出かけて行つていいものだろうか、こと食道外科に関してなら、今回の国際学会に限らず、今後、何度でも招聘状が来る機会があるから、僕は、何も無理をしてまで、出かけることはないんだよ」

国際外科学会に出席するか、どうかなどは、佃などに相談するまでもないことであつたが、東外科時代に眼をかけられていた者や、今度の教授選に非協力であつた者は、講師や助手はもちろん、婦長まで入れかえた極端な人事を断行したあとだけに、医局には細心の用心をし、もし、まだ医局内に不安定な気配が残つていれば、学会出席前に解決してしまわねばならないと考えたの

だった。佃は、ちよつと考え込み、

「先生、私のみるところ、確かにご就任当時は、人事に関する無責任なデマや雑音で医局内は、互いに疑心暗鬼、診療上に間違いを起さないと心配するほどでしたが、一週間前ぐらいから、これ以上、人事の動きはないと見たのでしょうか、やつと落ち着きを取り戻しております、したがって、先生のお留守中は、私と安西が陰の力になり、金井助教授をたてて、うまくやって行きますから、国際外科学会へは是非、ご出席下さい」

懇請するように云った。

「そうか、それなら、辞退せずに行くことにしようか」

財前は、はじめて不安定な医局に対する懸念を解いた。

財前は、長堀川沿いの新築のマンションの前で車を降りると、足早に玄関ホールを横切り、自動エレベーターに乗った。各階を示す黄色のランプの点滅を見詰めながら、財前は、つい二週間前まで、木造三階建のアパートの階段を軋みをたてぬように足音を忍ばせてケイ子の部屋へ通っていた自分の姿を思い出し、大学内だけでなく、私生活の面においても、以前と異った華やかな生活が開けていることに快い満足感を覚えた。

エレベーターが八階で止まると、ケイ子の部屋は、そこから十米ほど先の南向きの角部屋であつた。軽くノックをすると、内側から把手が廻り、ケイ子の顔が覗いた。ショート・ヘアの前髪を軽くかき上げ、切れ長の眼をやや細めるようにし、

「今日は、ちよつと早いね、念願の助の字が除れ、新教授になりたてで、張り切つてる最中や

から、もっと遅いと思つてたわ」

悪戯いたずらっぽい口調で云つた。

「ご挨拶だな、しかし、たまに早く病院を出てやらないと、教室員が緊張の連続で可哀そうだからな、ところで、どうだい、ここに住みごこちは？」

教授選の軍資金からうまく都合し、それで権利金を支払つた部屋であつた。十畳のリヴィング・ルームと八畳の寢室、それに台所、バス、トイレット付きという間取りは、さして広いものではなかつたが、冷暖房がきくことと、心齋橋しんさいばしまで徒歩で十分とかからぬ大阪の中心地でありなつた。それに、部屋の調度が、贅沢ぜいたくにしつらえられていることも、財前の氣持を満足させていた。ケイ子は、ソファに腰をかけて、すんなりと伸びた足を組み、

「静かなのが何よりやし、アラジンへも便利がいいわ、でも、一番有難いのは、何といつても、ここから見える夜の眺めやわ」

白い腕を伸ばして、レースのカーテンを引き開けた。八階建の建物の真下に、長堀川が黒く光りながら流れ、流れの両側に、赤、青、黄、緑など無数の夜の大阪の灯りが、饒舌じょうぜつな光を燦めかせていた。

「僕も、ここからの眺めが気に入って、この部屋にきめたんだ、ここからこうして、下界を見下している、まるで天下をとつたみたいないい氣持がするじゃないか」

財前は、自分の心の中を喋るしゃべるように云つた。

「じゃあ、よりにもよって、八階の一番角の部屋を選んだのは、天下を見下すような氣持になりたかつたのね、教授になると、病院以外のところでも、そんな氣持になつていたいね、ふう、

ふう、ふう」

ケイ子は、含み笑いをした。

「そう、いちいち、教授云々にからませるなよ、誰だって、上から下を見下すということは、悪い気持のしないもんだよ」

自分の胸のうちを見すかされたように苦笑すると、ケイ子は窓際の食卓へ、ビールとオードヴルを運び、

「どう、財前家におけるあんたの待遇は、大いに変わったでしょう、パトロンはこの頃、どうしてはる？」

「パトロン？　誰のことなんだ」

「海坊主とかいうあんたのお舅さんやないの、海坊主さんも、あんた以上に得意の絶頂というところでしょうよ」

ずけつと、遠慮のない云い方をした。

「なるほど、財前又一が僕のパトロンか、そういえば、確かにあの海坊主は、僕の大パトロンだな、しかし、そのパトロン氏の常軌を逸した喜び方には、いささか辟易させられるよ」

「ふうん、どんな工合やのん？」

面白そうに頬杖をついた。

「どうも、こうもないよ、一昨日、舅からちよつと見せたいものがあるという電話がかかって来たから、病院の帰りに寄ると、床の間に、僕から取り上げた文部省発令の教授の辞令を特別詔えの金縁の額に入れて、麗々しく掲げているんだ、全く仰天だよ」

「さすがは海坊主ね、やることがすべて、桁違いに愉快やないの」

ケイ子が、ぷつと吹き出すと、

「笑いごとじゃないよ、舅の気持は解らんでもないが、いくら何でもみつともないからと、取り下げを頼んだんだが、例の調子で、まあ、ええがな、ええがなと煙に巻かれて、そのままになってるんだ、もし岩田さんや鍋島さんなどの口から、大学関係の者の耳に入って、ゴシップにでもされたら、全くもって恰好が悪いじゃないか、何とか、うまく取り下げる智慧はないもんかな」

財前は、ほとほと困りきつた顔をした。

「さすがのあんたも、海坊主のお舅さんには齒がたたないようね、でもいいやないの、せっかくそれで大喜びなら、飾らせて、有難がらせてあげとくと、功德よ、それより、杏子夫人の方のご機嫌はどうなの」

「いうまでもなく、有頂天さ、教授決定の日から、こちらが照れるほどの奉り方で、親類、縁者はもちろん、出入りの御用聞きにまで、今度、たくが教授になりましてと、布れ廻っているんだから、やっぱり日頃は何の、かんのと云っていても親子だよ、近々、教授夫人会があつて、初出席だといふので、もう一カ月前から呉服屋を呼んで、着て行くもので大騒ぎだよ」

「ふうん、教授夫人会——、杏子さんには、大へんなおまけがあるのね」

そう云い、煙草にライターの火を点けたケイ子の眼に、嫉妬に似た色が奔ったが、すぐ何でもない表情で、

「で、どうなの、財前新教授には何か、おまけがあるの？」

「うん、僕はドイツの学会へ出かける、今日、国際外科学会から招聘状が届いたんだ」

ケイ子は、一瞬、眼を輝やかせ、

「そう、それはすごいおまけやないの、医局内のことには細心の注意を払っていると口癖のよう

に云つてゐるけど、この頃、えらく調子附いて、尊大で慢心気味のあんただから、この際、外国へ出かけて独りになって、頭を冷やすことやわ」

さり気なく云つたケイ子の言葉であつたが、財前の耳には、突然、かちりと引金がかれたような冷たさに響いた。

*

本町のS会館のフラワー・ルームで、浪速大学医学部の教授夫人会が催されていた。

財前杏子は、自分の容姿と贅沢な衣裳が充分、人目をひいてゐることを意識し、わざと遠慮気味に入口に近い窓際にたたずんでいたが、古参の教授夫人たちは、それぞれのグループをつくつて笑ひさざめきながら、時々、財前杏子へ視線を向けた。新参の財前教授夫人が、想像以上に美しいことが、古参の教授夫人たちに、穏やかならぬ気持を湧きたたせてゐるのだった。

太い男のような声がし、派手な舞台衣裳のような着物を着た鵜飼医学部長夫人の姿が現われると、話し興じていた夫人たちは、一斉に振り返り、鄭重な会釈をして迎えた。則内病院長夫人と産婦人科の葉山教授夫人は、素早く、鵜飼夫人の傍へ寄り、

「お待ち致しておりました、皆さまお揃いでいらつしやいます」

と報告すると、鵜飼夫人は背の低い小肥りの体を伸び上らせるようにし、

「まあ、もう、皆さま、お揃いでございますか、それは恐縮でございます、どうも私は、何時も時間ぎりぎりです、皆さんをお待たせばかり致しまして、申しわけありません」

そういうながら、一向悪びれた様子はなく、魚の鰓のように張つた顎を仰向け、入口に近い窓

際に畏^{かしこ}まっている杏子の姿に氣附くと、

「あら、財前さん、ようこそ、あなたは今日が、お始めてですわね」

何時もの新参者を迎え入れる時のもったいぶった態度とは少し異った鷹揚な口調で声をかけた。財前五郎が教授選に当選したその夜、すぐ夫婦揃って、高価な内祝を持って鵜飼邸へ挨拶に向向いたことが、鵜飼夫人の心証をよくしていたのだった。

鵜飼夫人が正面の席へ着くと、その席を挟^{はさ}んで両側に、臨床と基礎の教授夫人が互いに上座を譲り合いながら着席したが、鵜飼夫人の近くには、則内病院長夫人、産婦人科の葉山教授夫人、整形外科の野坂教授夫人など、今度の教授選で鵜飼派に与^よした教授夫人たちがざらりと隣り合って坐り、東派に与した第二外科の今津夫人や基礎の教授夫人たちは、目だたぬ地味な服装で下座の方にひっそり控え、教授選での勝敗が教授夫人会にまで露骨に現われていた。

鵜飼夫人は、そうした席順を確めるように見廻し、

「では、只今からくれない会の例会を開かせて戴^{いた}きます、本日はまず、前第一外科教授、東夫人に代って、新しくくれない会のメンバーになられました財前新教授夫人をご紹介致します、財前助教授、あら、失礼致しました、財前教授は、今さら申し上げるまでもなく、本学ご出身の少壮教授で、食道外科の権威者として早くから有名でいらっしゃいます、そのご活躍ぶりは医学専門雑誌のみならず、週刊誌、婦人雑誌にも紹介されておりますから、ここで改めてご紹介するまでもないことと存じます、ご夫人の方は、阪神女子大のご出身で、ご覧のように才色兼備のご聡明でお美しい方でございます」

そう紹介すると、末席に控えている財前杏子は、頬を紅潮させながら、椅子から起った。

「財前杏子でございます、この度は、皆さま方のくれない会に入会させて戴きまして、有難うご